

コーディネータ・ネットワークのポートフォリオ分析

○吉用武史、秋丸国広、國原幸一朗、末安亜矢子、佐藤暢
 (独) 科学技術振興機構 JST イノベーションサテライト高知

はじめに

産学官連携に関する取組みが各地で活発化しているなかで、その橋渡し役としてのコーディネータ（広義には産学官連携従事者）は、社会的にも重要な役割を果たしてきた。近年では、多様なコーディネータが集まって知恵を出し合うことで産学官連携活動の質を高める動きが起こっている。このような状況のもと、コーディネータ間の連携を図ることを主眼にしたコーディネータ・ネットワーク組織や機関が全国各地で立ち上っている。本学会の活動概要にも「産学連携諸機関の全国ネットワーク形成」の記載があるが、関連するそれぞれの組織や機関の関係性を俯瞰的に明らかにした例はほとんどない。そのため、それぞれの趣旨や狙いなどが混同され、「似通ったコーディネータ・ネットワーク組織の乱立」との誤解を与えかねない。

これらの動きと呼応して、四国地域においては関係諸機関のコーディネータ等が集まり、少人数で膝つき合わせて語り合える関係づくりを目指す「四国におけるコーディネータ力向上を目指す集い」（以下、「四国の集い」）が立ち上がった。JST イノベーションサテライト高知が主導するこの「四国の集い」の活動は、その緒に就いたばかりである。そこで、自らの立ち位置を検討するために、現在活動をしている代表的なコーディネータ・ネットワークや産学官連携の活動を抽出し、ポートフォリオ分析を行なった。

代表的なコーディネータ・ネットワーク

代表的な7つのコーディネータ・ネットワークの活動の趣旨や特徴の概要と「四国の集い」のそれらを合わせて表1にまとめた。これらの組織について、次頁に示すポートフォリオ分析を行った。

表1 コーディネータ・ネットワークの概要

名称	活動の概要や趣旨、目的など	
全国イノベーション推進機関ネットワーク 〔(財)日本立地センター〕	・全国の各種機関のネットワーク ・地域活性化のプラットフォーム	・地域発イノベーション ・組織同士のネットワーク
全国コーディネータ活動ネットワーク 〔(財)日本立地センター〕	・文科省コーディネータを中心に構成 ・大学の課題等を意見交換	・産学官連携活動の質的向上 ・大学から見た産学官連携
全国イノベーションコーディネータフォーラム 〔JST 産学連携展開部〕	・全国のコーディネータの集い ・人材育成と人材確保策の検討	・ノウハウや考え方の共有 ・全国レベルの人的交流
NPO 法人 産学連携学会 〔株式会社キャンパスクリエイト〕	・「産学連携学」の確立 ・産学連携業務の専門化	・地域連携活動の支援 ・学術的アプローチ
岩手ネットワークシステム (INS) 〔岩手大学工学部〕	・産学官民の交流の場 ・岩手の科学技術と産業の振興	・地域の科学技術と産業の振興 ・産学官民連携の爆発的な拡がり
四国地域イノベーション創出協議会 タスクフォース 〔(財)四国産業・技術振興センター〕	・産業クラスター計画の一環 ・四国企業の課題解決支援	・四国のコーディネータの集まり ・企業の課題解決に焦点
愛媛県産学官コーディネータ会議 〔愛媛県経済労働部産業支援局〕	・愛媛県の産業技術力強化 ・人的ネットワークの構成	・地域のポテンシャルを活かす ・県の戦略や施策に反映
四国におけるコーディネータ力 向上を目指す集い 〔JST イノベーションサテライト高知〕	・四国のコーディネータの集い ・本音を語る関係づくりと場づくり	・情報・知恵・ノウハウの共有と活用 ・地域に役立つ産学官連携

コーディネータ・ネットワークのポートフォリオ分析

ポートフォリオ分析とは、一般的には2つの重要な指標を設け、交差する軸上によって平面を区分し、そこに分析すべき各要素を配置する方法であり、マーケティング・リサーチや事業戦略立案などでよく用いられる。ここでは、コーディネータの組織が「全国組織か地方組織か」「大学寄りか産業寄りか」で軸を設け、また「政策提言型か個別解決型か」と「組織連携か個人連携か」を軸として、2種類のポートフォリオ分析を試みた。それぞれの結果を図1にまとめて示す。ここで設定した軸の解釈やポジショニング結果については議論の余地があるものの、各ネットワークの特徴や共通性・相違性などの概略を俯瞰的に把握することができる。「四国の集い」は人と人との関係づくりを目指している点から、図1右に示されるように個人連携重視の位置付けとなる点が特徴的である。

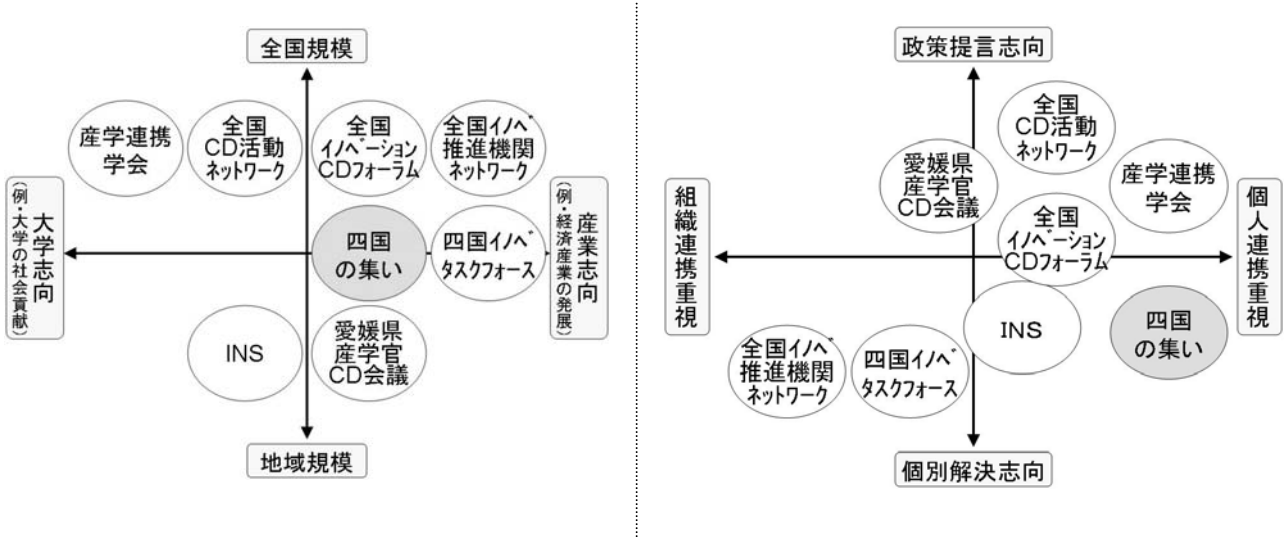


図1 ポートフォリオ分析の結果

考察

イノベーション創出をより効果的かつ効率的なものにするために、コーディネータ・ネットワークが必要であることは論を待たない。そのためにも、ここで提示したそれぞれの組織の自らの立ち位置を意識的に把握しておくことは、自らの活動の方向性や存在意義を改めて認識する上でも重要である。このことは、コーディネータ・ネットワークの経営や運営の舵取りを明確にするのみならず、個々のコーディネータの「営み」をより明示的に意識化させることにも繋がる。「人なくしてイノベーションなし」と言われるとおり、コーディネータ業務の本質は「人と人とを繋げること」にある。ならば、個々のコーディネータは如何にあるべきか。今後の産学連携学の議論の中でも、「コーディネータの人としての営み」は、一つのテーマになるのではないかとと思われる。「四国の集い」は、参加する各コーディネータが産や学の立ち位置にとらわれず様々な話題や課題を提起し、互いに情報・知恵・ノウハウを共有して、個別的な問題を解決していこうとする営みとなろう。

おわりに

「四国の集い」は、平成21年12月以来、過去2回の会合を通じて、各コーディネータ間での本音を語る関係づくりと場づくりを目指して活動してきた。今年度中に第3回目の会合を計画しているが、活動の真価が問われるのはこれからである。今日に至り、さまざまなコーディネータ・ネットワークが存在する中で、それらとの関係性、共通性や類似性を明らかにすることは、当初から自らに課せられた課題でもあった。今回、図1に示したポートフォリオ分析を通じ、自らの位置づけをあらためて確認できたと言える。